



## 南十字星の国

宮 脇 一 男\*

昭和17年4月6日、わたしは、日劇でレビュー「南十字星の下に」を見物していた。思いきや、3日後応召、そして1年後、自ら現実に赤道を越え、南十字星の下、インドネシアで、4年もの月日を送ることになろうとは。

そして、40年余を経た今日この頃、わたしは、日本・インドネシア語辞典の原稿づくりに精励し「みなみじゅうじせい Bintang Pari」などとタイプしている。まさに、星のとりもつ運命というべきか。

「今夜半、私は赤道を越えて南半球の人となります。こうして、北と南に隔たり、遠く万里に離れてゆくのは寂しいものです。甲板に立って頭上に燦然と輝く南十字星を仰ぎながら遙かに北の人を思っています」大正14年5月、侯爵徳川義親は、「馬來」での虎狩りのついでに、「爪哇」に赴いた折、流離の思いをこう手記に残しているが、生物学者でもあった侯爵は、昭和4年5月再度、爪哇に渡っている、今度は、第4回太平洋学術会議に参加するためであった。

当時のジャワは、オランダの勢威いまだゆるぐとも見えない植民地であり、「じゃがたら紀行」には「今度の会議については、阿蘭陀も多くの費用と労力を惜しまず、会長、委員は勿論、総督を始めとして官民より至るところ、心から吾々のために尽されました」とある。そして、会議後の見学旅行も、なにせ、南海の楽園でのこと、なかなかのものであったらしい、

さて、このような侯爵の「よき時代」の話の後に、わたしが「悪しき時代」の話を出す仕儀となったのは、たまたま、本稿の執筆を承った時点で、わたしの最大の関心事は「教科書問題」だったからである、さもなければ、わたし

は、南十字星の下、ヒンズーの神神の踊り狂うバリ島の夜を語りなどしたであろうに。

わたしの机上に、今まことに粗末な装丁の「インドネシア史」がのっている。これは、一昨年わたしがジャカルタの古本屋で入手した1968年版の教科書である。先史時代から1965年頃までが記述の対象となっているが、全315頁の中、日本が登場するのは8頁である。オランダは150頁ほどである。インドネシア人の史観では400年におよぶオランダの植民地支配は、日本によって受け継がれたことになる。このことは教科書中の次のような設問からも十分推知できる。

「日本の意図は、大東亜共栄圏（「Lingkungan kemakmuran bersama di Asia Timur Raya」）をつくることにあるというが、これは、帝国主義（Imperialisme）に他ならない。この事柄を説明せよ」

1942年3月8日蘭印軍降伏、この日より、インドネシアは日本軍の統治下に入った。この教科書はその後の軍政のしくみと聖戦（perang suci）遂行のための日本軍の厳しい締めつけを簡潔に記述している。

とくに、日本精神の注入と日本語の普及に重点のあったことが強調されている。一方、「学校と政府での用語がインドネシア語となっていたのは有難いことであった」との評価もある。しかし、気になるのは「romusya」の問題である。

「強制的に海外に送られた romusya は防衛、鉄道・道路工事などに従事したが、数千人は遂に故国に帰ることはなかった」と書かれているが、romusya は、むろん、労務者である。この単語は、すでにインドネシア語として定着し、ちょっと大きい辞書には、かならず収録されている。いや、驚くべきことに、米国コーネル大

\*宮脇一男 (Kazuo MIYAWAKI), 元大阪大学工学部教授, 工学博士, 電子工学

学刊行のイ英辞典なども例外ではない。

こうして「日本は、Jawa Hoko Kai などを組織し、われわれをさらに駆り立てようとしたが、これらはすべて失敗に帰した。民衆は日本の欺瞞を知り抜いていたからである。そして、民衆の苦しみは倍加し、日本の酷しさは増大した。しかし、戦況の悪化と共に、1944年に至り、日本は遂に、近い日のインドネシア独立を約束した」と続く。

謂ふ勿れ君よ別れを 世の常を はた生死を  
海原の遙けき果に 今はた何をか言はむ  
我ゆくはバタビヤの街 君はよくバンドンを  
衝け  
この夕相離るとも 輝かし南十字を  
いつの夜か又共に見ん いふ勿れ君よ別れを

これは大木惇夫の「戦友別盃の歌」の一節である。日本人特有のセンチメンタリズムに重なって、すさまじいばかりの気負いが感じられるではないか。この過剰な気負いが、長い年月悠悠たる生活に馴れてきたインドネシア民衆の気持ちとマッチする筈はない。

日本軍占領時代における民衆の困苦は、今でもしばしば雑誌などにとりあげられている。

わたしの手許の今年3月号のある雑誌は「1942年3月5日、日本軍がはじめてジャカルタに入った。人人はひしめきあって見物した。その翌日、日本軍は走行中の自動車を取り上げ、自動車もまた、車庫から奪った」と書き始め、13頁にわたって、極度な物資不足下の生活を詳細に描写している。

わたしは、このような記事を読みながら、当時、どん底生活の苦しみをそれほどあらわに表わすことなく、毎日真剣にわれわれの仕事に協力してくれたインドネシアの人人を想起し、何ともやりきれない思いがするのである。

さて、この雑誌の別なところには、「オランダ統治の最期」と題し、1942年3月8日、Kaliijati 飛行場における日蘭両軍司令官会見を扱った詳細な記事があり、今村軍司令官の日記も引用されている。「Ter Poorten 中将与わたしは、二通の降伏文書に署名した。中將がいかな



日本語を教わるスラバヤの高校生



日本製の鉄橋のそびえるパレンバン

る思いで、ポケットからボールペンを取り出したかを推しはかり、わたしは、いたく哀憐の情にかられた」

が、この記事のしめくくりには、痛烈というべきか、哀切というべきか、次の文言が見える。「こうして、蘭印の歴史は終わった。7000万人の生きる植民地の運命はきまった。主人が交替したのである」

今年の2月号には「40年前のジャワ海戦」をとりあげ、1942年2月27日における連合艦隊壊滅の様相が多く紙数を割いて紹介されている。

このような戦記が掲載されるのは、一つには、日本軍の勝利がインドネシア独立の契機となったからであろうが、もう一つには、最近のわが国の経済的発展が影響していることも間違いない。

戦後、インドネシア人は、もはや、日本に対し、それほど多くの関心をもたなくなっていただろうが、やがて、日本が目ざましく発展し、

自身との経済的なかわりが日ましに大きくなるにつれ状況は変わった。今や日本は、実に、いろいろな角度から観察、研究されているのである。

こんな提言もある。「進歩を望むなら 他民族に学べ、日本人もはじめは西欧を真似た。模倣が民族本来の文化をこわすというのは思い過ぎだ。世界史における最大の模倣者は日本民族である。しかし、誰も、日本本来の文化が死滅したとはいえない。国民性についても同様だ」

皮肉を意図したものではない。しかし、われわれは、ただただ苦笑するほかはない。

「東京の電車の扉は20秒しか開かない」で、都市交通の発達がいかに目ざましいものであるかを、「読者は母親の背中から始まる」で、いかに読書が重視され、また、ぼう大な図書出版があるかを、「日本人家庭での2週間」で、日本婦人が、夫と子供のために、いかに献身し、亭主は会社のために、いかに粉骨砕身しているかを紹介するなど、日本人を真面目人間、働き蜂としてとらえる記事も多い。

しかし、一方では、きわめて遊び好きな民族として見たものもある。

「東京・横浜国道沿いのクイン・エリザベス号」と題する記事は「日本人のレクリエーションは、すごくエネルギー、かつ、ユニークである」とし、豪華船の外観をもつ love-hotel の内部を紹介し、また 143kg の純金を使った浴槽につかり相好を崩している浴客の写真を掲げ、さいごに、かの悪名高きツアー (wista seks) に言及し、「他のアジア人の目にはよく映らないが、日本のビジネスマンにとっては仕事の延長にほかならない」と結んでいる。

題目からして、ギョッとさせるものもある。

「小指の漬け物」は、日本社会における YAK-UZA の存在を解説し、某親分との会談の様態を詳細に描写し、つめた小指が小瓶にたくわえられていることにも触れている。そして、この話の中に「日本人には独特なモラルがある。過ちは、懺悔でなく、忘れることで消失する。神道では、『生』は一つの暗い穴に終る。そのあと、最後の審判を気にすることはない」との文言もある。

論文類にも、日本がしばしば登場する。たとえば、Center For Strategic and Internasional Studies でも、昨年6月「変貌する世界の中の日本」を特集し、約100頁を費して経済、軍備面における日本の将来を展望している。

インドネシアの人々は、日本を知ろうと懸命である。しかし、日本人は、あまりにもインドネシアを知らない。いや、知ろうとしない。その上、自身を知ってもらう努力もしない。

このままでは、いつの日にかまた、われわれは、この南十字星の国の心やさしい1億5000万の人々をがっかりさせ、その結果、全欧州に匹敵する広大な自然からの恩恵をも失うことになるのではなからうか。

さて、もはや紙幅に余裕はない。時節柄とはいえ、このこちこちの随筆は、せめて、余韻尽きせぬ4行詩パントンの拙訳でしめくくろう。原詩は、昭和18年1月の村上清著「インドネシアの民謡」所載のものである。

ボゴールへ行くのはいやじゃない  
君の家なる日本傘  
声をかけるがいやじゃない  
主のいるのがこわいだけ